

中野ミツ

—私立大洲女学校の「生みの母」—

大洲市



中野ミツ

中野ミツ（1847～1926）は西宇和郡伊方浦（現伊方町）で、父増原岩五郎、母ミツの二女として生まれた。明治10（1877）年、喜多郡市木村（現大洲市市木）の中野茂三郎の養女として入籍する。以後、大洲町内に書店「雙松堂中野書林」を開業し、出版事業や地元子弟の修学援助に取り組んだ。

出版事業においては、明治初期の大洲で地元の青年教師や地元教育者らが著した4冊の書物を出版している。これらの中には、小学校の教科書として全県的に広く採用されたものもあった。出版事業への理解を示し、財政的な支援と販売を担当したミツは、大洲の出版界に大きく貢献した。

また、熱心なキリスト教徒であったミツは、多くの青年たちに教育援助を行い、近代を担う人材の育成にも貢献している。援助を受けた子弟の中には、のちにシャム国（現タイ）の法律顧問・最高裁判所判事になった政尾藤吉や、養子として迎え、フランスへ留学させた洋画家中野和高らがいる。

また、私立大洲女学校の創立に当たっても、中心的な存在として尽力した。発起人は県立宇和島中学校大洲分校の教員たちで、その一人、豊川英吉は女学校創設の意気込みを後年、次のように語っている。「中学校も県立となり、男子は立派に教育も受け得る事になったが、女子教育のことは、何処からも声が出ない。其必要なことは申す迄もない。いわゆる国家的事業である。しかし、完備の時代はまだ来ぬ。せめて、其土台として八畳敷位な処でも、女学校の看板を掲げたい」。

こうした豊川らの熱意に共鳴し、協力者として創立への大きな推進力となったのが、ミツである。ミツは中野書林を創立事務所として、女性教員の招請や学校設立の資金集めに奔走し、自らも大洲財界や産業人を代表する人物らと同額の百円を寄付している。そして、当時の大洲町長に「女学校校主（設立者）」に就任してもらうよう根気強く説得に当たり、ついに明治36（1903）年、大洲町龍護山の寺院を仮校舎に、私立大洲女学校が開校した。

ミツの最後の仕事は、この仮校舎から独立した大洲女学校の校舎建築であった。これもミツらの尽力により、2年後には大洲町中島（現大洲南中学校）に新校舎が落成、移転している。私立大洲女学校は、その後、大洲町立、喜多郡立となり、大正11（1922）年に愛媛県立大洲高等女学校（現大洲高等学校）になった。

中野ミツは、出版事業や後進の育成、学校の設立などを通じて地域振興に尽力した。

〔参考資料〕

編集委員会 『日本キリスト教団大洲協会八〇周年記念誌』

大洲市誌編纂会 『大洲市誌』

大洲高等学校 「大洲高校研究紀要第10号」『大洲高等学校百年』

澄田恭一 『学校を掘る 愛媛県立大洲高等学校の歴史と文化』

牧野隆史 『発掘えひめ人—近代を拓いた101人—』

澄田恭一 『大洲・内子を掘る 埋もれた人と歴史と文学と』



私立大洲女学校跡の石碑